研究ノート

ジョージ・A・バーミンガムの短篇小説「結婚式への招待」

八　幡　雅　彦

George A. Birmingham's Short Story, "The Wedding Party"

Masahiko YAHATA

はじめに

ここに訳出するGeorge A. Birmingham (1865－1950)の短篇小説"The Wedding Party"は、1935年、ロンドンのMethuenから出版されたバーミンガムの短篇小説集*Love or Money and Other Stories*のうちに収められた１篇で、筆者が翻訳のテキストとして用いたのは同社から1939年に出版された第２版である。

バーミンガム研究の先駆者R. D. B.フレンチ（R.B.D. French）は、バーミンガムの初期の政治小説*The Seething Pot*（1905）と*Hyacinth*（1906）を「キリスト教道徳者の作品」と呼んだ。(1972年)

バーミンガムの本名はジェイムズ・オウエン・ハネイ（James Owen Hannay）で、北アイルランド・ベルファーストのアイルランド国教会聖職者の家庭に生まれ、自らもトリニティーカレッジ・ダブリンの神学部に学び、1888年から亡くなる年の1950年までアイルランド国教会、イギリス国教会の聖職者を務めた。

*The Seething Pot*と*Hyacinth*は、本来はイギリス派であるはずのプロテスタントの青年たちがアイルランドの独立運動に身を投じ挫折する様を描いた。"seething pot"は聖書に出てくる文句で、バーミンガムは当時のアイルランドを「煮えたぎる鍋」にたとえて、アイルランド独立運動には幾多の困難が立ちはだかるが、それを乗り越えて運動を続けてゆく必要性を訴えている。*Hyacinth*においては、偽善的ユニオニズムに対する批判がなされていると同時に、穏健派の国教会司祭が急進的ナショナリズム思想の持ち主である主人公を諭す。またこの２つの作品と共に３部作を構成する*Benedict Kavanagh*（1907）においては、ナショナリストの国会議員の息子として生まれた主人公が、父親の死後、父親の友人であったユニオニストのアイルランド国教会司祭に育てられ、ナショナリズム、ユニオニズム双方に正義があることを悟り、苦悩する。確かにこれらのバーミンガムの初期の政治小説は、アイルランドの将来はどうあるべきかを真剣に模索したキリスト教道徳者の作品と言えよう。

1908年、バーミンガムは突然変異のごとく、それまでの深刻な政治小説とはまったく趣を異にするユーモア小説*Spanish Gold*（1908）を発表する。アイルランド国教会司祭J. J. メルドン（J. J. Meldon）が友人であるイギリス退役軍人のケント元少佐（Major Kent）と共にアイルランド西部の離れ小島に黄金探しの冒険に出かけ、そこで出くわした悪漢たちを、カトリック神父と島民たちと力を合わせて撃退する。その後もバーミンガムは荒唐無稽とも言える60作近いユーモア小説を発表し続ける。これ

らの小説の主人公たちの多くは狡猾な策略を用いて、自分と、自分の周囲の人々に利益をもたらすため獅子奮迅の働きをする。*General John Regan*（1913）は、アイルランド西部の町に住む主人公のオグラディー医師（Dr. O' Grady）が住民たちと結託してアメリカ人富豪をだまし、町に大金を寄付させようと画策する物語である。この小説の演劇が、舞台となったウェストポートで上演された時、人々はアイルランド人を誹謗したと誤解し、アイルランド演劇史上最悪の暴動を起こし、劇を中止に追いやった。しかし実際にはこの作品は、結末でアメリカ人富豪が「アメリカにはオグラディー医師のようなエネルギーに満ちあふれた医師はいない」と賞賛したように、住民たちが宗教、政治信条の違いを超えて町の利益のために一致団結する姿を描いて、カトリックとプロテスタント、ナショナリストとユニオニストの融和を真に願ったキリスト教道徳者の作品なのである。

Spanish Gold から40年後の1948年、J.J. メルドン司祭とケント元少佐は *A Sea Battle* の中で再びアイルランド西部の離れ小島に出かけ、この島に身を隠そうとしたナチスドイツの戦争犯罪人を撃退する。そしてこの時もまた、メルドンが40年前に出会い、その後も友情を保ち続けていたカトリック神父が快く彼らに協力する。この40年の間に、アイルランドはイースター蜂起（1916年）、第一次世界大戦（1914年～18年）、アイルランド自由国成立に伴う南北の分断（1922年）、アイルランド内戦（1922年～25年）、第二次世界大戦（1939年～45年）と、アイルランド史上最も激動といえる時代を経験した。それにもかかわらずバーミンガムの博愛と寛容のキリスト教精神はまったく揺るがなかったと言えよう。

“The Wedding Party”もまたバーミンガムのキリスト教精神に基づく博愛と寛容の精神が現れたユーモア短篇であり、全ての登場人物に対するバーミンガムの善意が滲み出ている。ミス・ドリス・ウィンスロップ（Miss Doris Winthrop）と４人のガールスカウトたちはバーミンガムのユーモア小説にしばしば登場してくるエネルギーに満ちあふれた女性たちである。レディー・ミリセント（Lady Millicent）はイギリス貴族で、上流階級意識、自尊心が強い人物だが、嫌味を感じさせない凛とした女性である。彼女のお抱え運転手シンプキンズ（Simpkins）はユーモアの引き立て役として描かれている。ベントン伯爵（Earl of Benton）はアイルランドに邸宅を構えるイギリス人貴族である。長年のアイルランド住まいで、快活でユーモアに溢れたアイルランド人気質が乗り移っており、彼の描写のうちにはバーミンガムのアイルランドに対する愛情がうかがえる。

結末でベントン伯爵はシンプキンズに対して、半分冗談、半分本気で「シンプキンズも撃ち殺されなくて済みました。シンプキンズ、良く覚えておけ。ここはアイルランドだ。男は、全然大したことをやっていなくても撃ち殺されることが良くあるのだ」と言う。これはバーミンガムの自叙伝 *Pleasant Places*（1934）に述べられた彼の実体験に基づいていると思われる。1918年から20年までバーミンガムはキルデア州カーナルウェイ（Carnalway, Co. Kildare）のセント･パトリック教会（St. Patrick Church）の司祭を務めた。イースター蜂起後間もない時期で、シンフェイン（Sinn Fein）のテロ活動が激しく、しばしばアイルランドに住むイギリス人たちの命が狙われた。そしてイギリス政府は彼らを取り締まるために、彼ら同様に凶暴なブラック・アンド・タンズ（Black and Tans）を送り込んで警備に当たらせていた。ある時、バーミンガムは怪しい人物と間違えられてブラック・アンド・タンズのひとりに撃ち殺されそうになった。またバーミンガムの若いお抱え運転手が、シンフェインのテロリストから「撃ち殺されたくなければ、24時間以内にアイルランドから去れ」という脅迫状を受け取った。彼は最初のうちは勇敢にもその脅迫を無視したが、３週間後、すっかり精神に支障をきたして一睡もできない状態になった。そこでバーミンガムは彼を手助けして、アイルランドから出国させた。ベントン伯爵のシンプキンズに対する警告は当時のアイルランドとイギリスの対立を

示唆しているが、バーミンガムはテロリズムをも笑い飛ばしているかのようである。

ジョージ・A・バーミンガム「結婚式への招待」

１台の自動車がカーディガンの街を用心深く、縫いながら走り抜けていった。ハンドルを握っているのは、ガールスカウトのリーダーの制服を着たミス・ドリス・ウィンスロップだった。彼女は、助手席に座っているガールスカウトと、後部座席に身をひしめき合っている３人のガールスカウトたちからときおり「団長」と呼びかけられていた。ミス・ウィンスロプは用心深く運転した。カーディガンを抜けて広い道に出ると、やっと自信を持って運転できるようになった。彼女は、この自動車を運転するのは初めてだったが、ある程度の運転技術は備えていた。風が強くなり、突風に変わろうとしていた。

前夜の天気予報は最悪のもので、BBC のアナウンサーは海を渡る旅に関しては極めて良くないことを言っていた。しかし呻り狂う風の音は少女たちに新鮮な興奮を与えただけで、まとまって強く降り始めた雨さえも彼女たちの心を湿らせるには力不足だった。ミス・ウィンスロップだけはかなり不安になってきた。彼女は、強い雨の中、知らない道を運転するのは嫌だった。雨が強さを増し、風がさらに激しく窓ガラスを打ちつけるようになると、道路標識はますます見えにくくなってきた。ミス・ウィンスロップは、自動車のうしろに縛り付けた大きな黒いケースはたぶん防水ではないだろうと思い、苛立っていた。そのケースの中には２張りのテントと、ミス・ウィンスロップ自身の替えの制服と、４人の少女たちのあれやこれやの衣類と、全てのキャンプ用品が詰め込まれていた。もし雨が染み込んできたら・・・ミス・ウィンスロップは、土砂降りの雨の中、アイルランドの湿地帯の真ん中で湿ったテントを張ることを思うと、ゾッと身の毛がよだった。彼女は、―それはイギリス人たちに共通の考えだったが―アイルランドの土地は大部分が湿地帯であると思い込んでいた。

自動車は、西ウェールズ突端の町フィッシュガードで途絶える、長い吹きさらしの道へと消えていった。

30分後、カーディガンを、ミス・ウィンスロップが乗っているのと型も作りも同じもう１台の自動車が走り抜けて行った。そしてその自動車もまた、うしろに荷物を運ぶための大きな黒いケースを縛り付けていた。車の外見はまったく同じだったが、中に乗っているのはまったく異なる人間だった。この２台目の車のハンドルを握っているのは正装したお抱え運転手で、相当の運転技術と経験を備えた若い男性だった。大部分のイギリスのお抱え運転手同様、シンプキンズはアメリカ製の自動車を軽蔑していた。彼はまた悪天候の中を長時間運転することを嫌い、特に船旅を心の底から嫌っていた。シンプキンズにとって海は嫌悪の的だった。というのは波ひとつない穏やかな日でさえも彼はひどい船酔いをするからだった。この車の後部座席にはレディー・ミリセントが座っており、彼女はヒューヒューという風の呻りを聞いた時、身震いした。スコールになった、激しい風を伴う雨が窓を打ち付ける度に、彼女は体に巻いている毛布をさらに深くたぐり寄せ、どうして自分は愚かにもこのような旅行をする気になったのだろうと悔やむのだった。しかし彼女自身認めざるを得なかったように、それは避けられない旅行だった。彼女のただひとりの兄弟であるベントン伯爵の娘が翌日結婚することになっており、それはまさに理想的な組み合わせの結婚だった。この上なく理想的な組み合わせの結婚だったのでレディー・ミリセントは式に欠席することなど考えも及ばなかった。

シンプキンズは運転を続け、その車もまた、前の車と同じように、フィッシュガードに達する道へと消えて行った。

雨風が吹きすさぶ嵐の夜、フィッシュガードの小さな町ほど魅力に乏しい場所はたぶん世界中どこにもなかった。

ミス・ウィンスロップは不安げに彼女の自動車を蒸気船フェリー切符売り場の入口に停車さ

せた。４人のガールスカウトたちの快活な精神さえもさすがに萎えかけていた。しかし、漠然とした恐怖以上に悪いものがミス・ウィンスロップを待ち構えていた。フェリーの切符販売員から、その日の夜は自動車は載せられないかもしれないと聞かされたのである。販売員が言うには「船は間違いなく出ます。もしお望みでしたらお客さんも乗れます。しかし自動車を載せられるのは甲板だけで、突風が吹いている時は、自動車が甲板に載っていると船の操縦にこの上ない支障を来すのです」ということだった。

フェリーの船長の決断を待つこと、そしてその間はホテルに待機して夕食を取る以外なかった。

20分後、２台目の車が到着し、シンプキンズが運転席から降りてきて、自動車の積載について尋ねるために蒸気船フェリー切符売り場に入って行った。彼はミス・ウィンスロップが聞かされたのと同じこと、すなわち自動車は載せられないかもしれないということを聞かされた。シンプキンズはその知らせを、喜びを臆面も隠すことなく聞いた。彼はフィッシュガード・ホテルでその日の夜を過ごすことに異存はなかった。レディー・ミリセントがホテルでの娯楽の代金は払ってくれるだろう。そして、その日の夜のうちに海を渡ることができなければ、決して海を渡ることはないということが彼には分かっていた。結婚式は翌日の朝11時と定められており、翌日以後の夜に海を渡るのは何の意味もなかった。レディー・ミリセントがフィッシュガードでこの日の夜を過ごさなければならないとしたら、翌日には再びウィルトシャーの自宅に運転して帰ることになり、シンプキンズも車も海を渡ることはなくなる。

レディー・ミリセントは知らせを聞いた時、この状況に関してまったく異なる見解を抱いた。「フェリーの船長は、私の自動車を載せるのを拒否することにより、わざと不愉快なことをしようとしているのだわ。伯爵の娘で、別の伯爵の妹でもある私のような高貴の身分の女性に対して、一介のフェリーの船長にそんなことをする権利はないわ。どんな突風が吹きすさぼうとも私は絶対考えを変えないつもりだわ」彼女は毛布を取り払い、コートを羽織って、蒸気船フェリー切符売り場に直行した。そこで彼女は彼女の考えを切符販売員にまくし立て、彼をすっかり縮み上がらせた。決断はすべて船長の手にゆだねられた。そして、これは最後の打撃だったが、船長はどこにもいなかったのである。誰も船長の居場所を知らなかった。そして出港のおよそ１時間前の11時頃に船長が姿を現し、船の操縦席につくまでは、彼が見つかる可能性はなかった。

シンプキンズは、「上のホテルに行って夕食を取るのがベストですよ」と提案した。レディー・ミリセントは、シンプキンズの忠告はもっともだとみなすだけの思慮分別はあった。

ホテルのレストランの片隅にはミス・ウィンスロップと彼女の４人のガールスカウトが座っており、大きな紅茶ポットと、厚いパンの切れとバターが目の前に置かれていた。ミス・ウィンスロップは、夕食としてこれぐらい食べさせてやれば十分だろうと考えた。そして実際、―彼女自身はそのことを推論したわけではないが―もし彼女と彼女のガールスカウトたちがその日の夜海を渡るとしたら、前もって何を食べようが食べまいがほとんど変わりはなかった。

レストランの別の隅のテーブルにはレディー・ミリセントがひとりで腰掛けていて、ウェイターがコース料理の食事を次から次へと運んで来ていた。彼の見解では、ガールスカウトたちは給仕する必要も価値もなかった。彼は、ますますレディー・ミリセントに、媚びへつらうような丁重さで仕えていた。というのは、彼女は、それが最高の船酔い止めの薬だと聞いたことをかすかに覚えていて、このホテルではあまり飲まれることのないハーフボトルのシャンペンを注文していたからである。

１階のホテル従業員用の部屋でシンプキンズは夕食をたらふく食べた。彼は、船長は自動車を船に載せることを拒否するだろうと確信していたので、その日の夜は陸の上の頑丈なベッドの中で寝られるつもりでたらふく食べた。しかし、結局は船に乗るハメになるのではないだろ

うか。この恐ろしい見込みを前にして、彼は夕食後にブランデーを２杯注文し、ストレートでガブ飲みした。彼は、船酔いした時はブランデーをするのが最高の治療薬だと聞いていた。もし治療薬になるのなら、船酔防止のためにもブランデーはきっと良いかもしれないと彼は考えた。

11時、あるいは11時少し過ぎ、フェリーの船長が休憩所から姿を現し、船に乗った。彼は桟橋に並んだ２台の自動車を見て、首を横に振った。彼は、船の入口のところで彼の到着を待ち受けていた副船長に相談し、再び首を横に振った。そして彼は心を決めた。天候は悪い。こんな夜に自動車を運ぶのは厄介で困難な仕事だ。しかし義務は義務だ。会社の名誉に関わることだ。旅行中の自動車を運ぶのは儲けになる。それにフィッシュガードからロスレアまで自動車を運べない可能性がありうるなどということが外に知られるのは決して良いことではない。船長は断固として指示を出した。「自動車を積め。細心の注意を払って定められた場所に置き、防水カバーをかけてしっかり固定せよ」

切符売り場の職員は、メッセンジャーにこの知らせをホテルに届けさせた。その知らせを聞いてミス・ウィンスロップはホッとし、４人のガールスカウトたちは身震いして喜んだ。シンプキンズは腹を立て狼狽し、一瞬、断固拒否しようと、たとえ仕事を失うことになってもその日の夜海を渡ることを断ろうと考えた。しかしシンプキンズは幾分なりとも思慮分別を備えた若者だった。レディー・ミリセントのお抱え運転手というのはこの上なく理想的な仕事だった。彼はその仕事を失いたくなかった。

その知らせはレディー・ミリセントに新たな不満を呼び起こした。彼女は、その日の夜はホテルで過ごし、結婚式は欠席するつもりだとすっかり気を変えていたのだ。レディー・ミリセントにとって、船長の決断は、下流階級の人間たちが彼らよりも上流の人間たちの生活を耐え難いものにしようとする、もうひとつの悪意の表れだと映った。しかし、その決断がなされた以上、彼女には旅行を避ける方法が見つからなかった。フェリーが出港し彼女の自動車を運べるのならば、翌日のアリス令嬢の結婚式に出席できない言い訳は何ひとつできなかった。

ロンドンからの列車の到着後、しかるべき時間にフェリーは出港した。２台の、カバーで覆われた自動車は並べて固定された。広い特等船室でレディー・ミリセントは寝台に体を横たえた。彼女に媚びへつらいながら仕える船室乗務員が、ちょうど良い頃合いにたんつぼのようなものを持ってきたが、彼女の気分が明るくなることはなかった。ふたつの、ずっと劣る客室では、ミス・ウィンスロップと４人のガールスカウトたちがなんとかして不快感を取り除こうとしていた。船の別の場所ではシンプキンズが、溺死以外の、ありとあらゆる最悪の事態に陥っていた。

翌朝の明け方、フェリーはロスレアの桟橋に到着した。ひとりひとり、悲惨な乗客たちは船を下りた。ミス・ウィンスロップとガールスカウトたちは蒼白でやつれきっていた。一番年下の少女だけが、陸に上がって30分後、回復の兆しを見せた。

レディー・ミリセントは、桟橋の隅の、木陰のベンチに腰を下ろし、目を閉じて背をもたせかけ、次に起きたことにはまるで無関心だった。シンプキンズは、一行の中では最悪の体調で、男らしさ、自尊心のかけらもなかった。地面に伸びて、顔を突っ伏せて時折呻き声を上げていた。彼は、再び安全に陸地に上がった後も長い間船酔いが止まらない不運な人間のうちのひとりだった。残りの乗客たちは、彼らを待ち受けていた列車の中へと消えて行った。自動車でやって来た二組だけが桟橋に取り残された。船長は親切な男性で、彼らに同情し、船室乗務員にトレイにブランディーグラスを載せて運ばせた。レディー・ミリセントは目を閉じたまま断った。ミス・ウィンスロップは、小さじ一杯飲んだだけで、すぐにまた気分が悪くなった。彼女は、残った力を振り絞ってガールスカウトたちにブランディーを口にしないようにと警告した。船長はシンプキンズだけは完全に軽蔑し、船室乗務員が彼に近づくことを許可しな

かった。

30分後、２台の自動車は船から降ろされ、桟橋に並べて置かれた。レディー・ミリセントは、彼女の兄の家まで車で１時間かかるので、一刻も早く出発したかった。彼女は、シンプキンズの義務感を呼び覚ますためにスクッと身を起こした。彼女は彼を傘でつついた。シンプキンズは、よろめきながら自動車のところに行った。彼は自動車ではそこから先に行くのは不可能であることを知った。ロスレアの桟橋は道路とつながっておらず、鉄道貨車以外はここから出ることができない。イギリスから運ばれて来た自動車は、桟橋から鉄道の貨車で輸送し、道路に達したところで下ろす必要があるのだ。近くに立っていた愛想の良い荷物運びは、このことをシンプキンズに説明した。シンプキンズはその知らせを聞いても何も言わなかった。彼はむしろホッとした。蒸気機関車も貨車も目には入らず、自動車を輸送する手段はなかった。彼は再び突っ伏せて呻いた。

レディー・ミリセントは、助けが必要ならば自分で見つけなければならないと悟った。彼女は、愛想の良い、お喋りの荷物運びと渡り合った。彼は彼女に、鉄道会社は、自動車を適切な貨車に乗せて輸送するために、特別な小型機関車を用意してあると説明した。毎朝、フェリーが着いた時、その機関車は几帳面に役割を果たしているが、この日の朝に限ってはそこに姿がなかった。そして、荷物運びの説明通り、「今の時間はここに来られない」のだった。レディー・ミリセントはなぜなのかと詰問した。「ここに来るのが機関士の義務だというのに、どうして来られないの」彼女はベントン卿の名前を持ちだした。兄の家はロスレアから30マイル足らずだから、たぶんその名は畏敬の念を起こさせるだろうと彼女は思った。たぶんその通りだった。荷物運びはそれまでにもまして媚びへつらい、愛想良くなったが、機関車を登場させることはなかった。その代わりに彼はレディー・ミリセントに機関車が来ていない理由を説明した。

「運転するのはティム・ドネリーの奴でございまして。実は、昨日の夜、ウォーターフォードで奴の女房の親父の通夜がございまして。ティムの奴、通夜に出て一体何ができるってんでしょうねえ。でも、きっともうすぐしたら奴はここにやって来ます。葬式まで待ち切れんでしょう」

レディー・ミリセントは、通夜がいかに重要なものであるか、その「お祭り騒ぎ」が終わるまではティム・ドネリーに会うことを期待しても無駄だと分かるくらいのアイルランド的素養は備えていた。彼女は惨めな気分で再び椅子に座った。

やっと指定された時間の１時間後、ティム・ドネリーと彼の機関車がやって来た。彼と荷物運びは、貨車を機関車に連結させ、車のうち１台を押し込んだ。ベントン卿の名とレディー・ミリセントの明らかな威厳に敬意を表して、荷物運びは先に彼女に出発する機会を与えた。優しく、この上なく丁重に、彼は、彼女と彼女の衣装ケースと毛布を車に載せた。それから彼とティム・ドネリーはシンプキンズを立ち上がらせた。船酔いから来るひどい嘔吐は通り越えていたが、その不幸なお抱え運転手は一種の昏睡状態に陥っていた。引っ張ったり、揺すったり、叫んで元気づけたりしながら、彼らはなんとかシンプキンズに目を開けさせた。彼らは彼を車まで引きずって行き、運転席に座らせた。それからティム・ドネリーは彼の機関車を出発させ、道路に達するまで貨車をガタゴトと引っ張って行った。道路に着いた時には、シンプキンズは自分で動けるようになっており、貨車から自動車をバックで降ろし、運転して行った。１時間半後の午前８時30分頃、レディー・ミリセントは兄の家に到着し、同情したメイドから寝室に通され、熱い風呂に入った。

ティム・ドネリーは１台目の車を片づけた後、２台目を乗せるために戻って来た。その車もまた貨車に載せられた。ミス・ウィンスロップはまだ頭がボーッとしていたが、立ち直ろうと必死に努力し、運転席についた。４人のガールスカウトたちも自分たちの席に座った。一番年下の少女だけが話ができるまでに回復してい

た。彼女は席に着くなり口を開いた。

「団長、大変！　私、昨日の夜、車の中にミルクチョコレートを置いてたんだけどなくなってるわ」

そのような食べ物のことなど考えただけでもミス・ウィンスロップはむかついた。彼女はその子をきつく叱りつけた。

道路に着かないうちに少女はまた別の発見をした。前の日の夜、彼女は、ミルクチョコレートといっしょに、車のポケットにスカーフを置いたままにしていた。それもまたなくなっていた。その代わりに車のポケットには、２冊の道路地図帳と１本の小さな香水の瓶が入っていた。

「団長、大変！」と少女。

しかしミス・ウィンスロップはこの時は自動車を貨車からバックで降ろすという難しい仕事に気持ちを集中しており、最初から少女の言うことを無視した。

ミス・ウィンスロップとその一行は、真西へと向かう道路の分かれ道を運転して行った。その前にレディー・ミリセントとシンプキンズの車は、北西方向にベントン卿の邸宅へと向かう別の分かれ道を走り去っていた。

９時半、レディー・ミリセントは、熱い風呂のおかげで完全に回復し、トレイに載せて運ばれて来たおいしいい朝食を食べてほとんど元の普通の状態に戻り、彼女の義理の姉のメイドが彼女のために持ってきたガウンを着て、寝室のソファに座っていた。11時の結婚式に間に合うためにはそろそろ着替えをしなくてはと彼女は思った。彼女はベルを鳴らした。

「私の荷物は自動車から部屋の前まで運んで来てもらっていると思うのだけど」彼女は入ってきたメイドに言った。

「左様でございます。シンプキンズ様が持って上がって参りました。あなた様ご自身で中身をご確認なさった方がよろしいかもしれないとシンプキンズ様は申されました」

レディー・ミリセントは、雨あるいは海からの波が自動車の後ろに積んでいた大きな黒い旅行ケースに染み込み、その中に詰め込んでいた２つの革製の荷物かばんの中も水浸しになっているのではないかというひどい恐怖に囚われた。もしそうだとしたら、彼女が結婚式で着る衣装は他のいくつかの衣装とともに台無しになっている可能性があった。

どこに到着した時も自動車に取り付けた黒いケースを開け、ふたつの荷物かばんを取り出し、室内に入れてレディー・ミリセントの部屋まで運ぶのがシンプキンズの務めだった。彼女が思ったのは、今回は、雨と海水が与えた被害を彼女の目で確認できるようにとシンプキンズは黒い旅行ケースごと持って上がったのだろうということだった。

「旅行ケースはどこ」と彼女。

「外の廊下でございます。中にお持ちいたしましょうか」

それはまさにレディー・ミリセントが望んでいたことで、メイドはもうひとりのメイドの助けを借りてそのケースを中に運び込んだ。外目にはさほど雨と海水の被害を被っているようには見えなかった。レディー・ミリセントは開けるよう命じた。メイドは従った。そのケースから引っ張り出されたのは支え用のロープと杭が付いたテントだった。次に出てきたのは、組み立て式で、釣り竿と同じようにぴったり当てはまるようになっている支柱だった。

「これは一体何なの」とレディー・ミリセント。

メイドはアイルランド娘で、イギリス人のメイドのようにきちんと教育されておらず、クスクス笑いが止まらなかった。

「クックックッ・・・私はあえて申し上げませんが・・・クックックッ・・・それはテントかもしれません。クックックッ・・・どこから見てもテントのようですね・・・クックックッ」

荷ほどきは続いた。ガールスカウトの団長の制服が現れた。次に出てきたのは、損傷を防ぐために何足ものストッキングでくるまれた石油ストーブだった。次にはフライパン、そして次には大きな四角いビスケット缶が出てきて、その中には多量のベーコンが入っていた。その時

点でミス・ウィンスロップは荷ほどきを止めるよう命じた。

「運転手のシンプキンズを捜してきてちょうだい」彼女はメイドに言った。「すぐに見つけ出して、私のところに寄こして来てちょうだい」

シンプキンズがやって来た時、レディー・ミリセントはまだガウンをまとっており、羽布団を足にかけてソファに横になっていた。

シンプキンズは、ケースと、床に散らかったケースの中身を見た。

「実を申しますと」とシンプキンズ。「ケースをあなた様のところにそのままお持ちした方が良いと思いまして。私には、あなた様が期待されていたものとはずいぶん違うような気がいたしまして・・・」

確かにそれは貴婦人が期待していたものとは違っており、彼女はシンプキンズに強い口調で語りかけた。彼女は説明を求めた。

シンプキンズは説明した。

「そ、その、朝ごはんを食べた後で私は車を見に行きまして・・・す、すぐに私たちの車ではない、同じ車種の別の車だということに気づきまして・・・。アメリカの車というのは、」彼は文句を言った。「大量生産をするものですから見分けがつかないほど良く似ておりまして・・・」

レディー・ミリセントは何が起きたかをすぐに悟った。彼女は、ロスレアの桟橋にとまっていたもう１台の自動車のことを思い出した。シンプキンズはその間違った自動車で彼女を運んだのである。そこで彼女は、彼女のお抱え運転手のことを何と思ったか、本当にどれほど信じられない類の大馬鹿者であるか、言おうにも言葉で言い表わせなかった。彼女は暴言の吐き方を習ったことがなかった。彼女はメイドに向かって言った。

「お兄様を捜してきてちょうだい。それから、話があるからすぐにここに来るように言ってちょうだい。シンプキンズ、あなたはここにいるのよ」

数分後、溌剌とした陽気なアイルランド貴族であるベントン卿が彼の妹の部屋に入ってきた。

「やあ、ミリー」彼は妹を心から歓迎した。「結婚式衣装はまだか。早く着替えないと。もう10時が近いぞ。アリスが教会に入ってきたら泣く用意をしておいておくれ」

レディー・ミリセントは教会に行くのを待つまでもなく、すぐにでも泣き出しそうな気配だった。

「教会になんか行けないわ」と彼女。「とんでもない事が起きたのよ。そのせいはすべて・・・」ここで彼女は言葉を止めて、不幸なシンプキンズを指さした

ベントン卿は彼のあたりを見回して、テントと石油ストーブが目に入った。

「なんということだ、ミリー！　一体おまえは何のためにこんながらくたを持ってきたんだ」

「全部このお抱え運転手のせいなのよ」とレディー・ミリセント。

それからレディー・ミリセントは彼女の話を、事の顛末すべてを語った。シンプキンズが桟橋にどれほどぐったりうつ伏せて、機関士と荷物運びがどのようにして彼を自動車の座席まで引っ張って行かなければならなかったかを語った。

「でもそれが、他人の車を運転して行って、私の車を置き去りにしていい言い訳なんかにはならないわ」

シンプキンズは、完全に打ちひしがれたわけではなく、自己弁護をし、再びアメリカの自動車の大量生産システムついて文句を言った。

「お願い、お兄様」レディー・ミリセントは兄に言った。「お兄様はこの人のことをどうお思いになるのか、この人に仰って下さらない。私の言葉では不十分ですの」

ベントン卿は、彼の妻のメイドに頼んで、結婚式にふさわしいかもしれない2, ３着のドレスを持って来させようかと提案した。しかし彼は、そう言っている時でさえも、そのような慰めはまったく無駄であることが分かっていた。彼はシンプキンズを屋敷の外、並木道に連れだ

し、娘の結婚式のために庭師に作らせた「凱旋門」のところで立ち止まった。そこで彼は、きっぱりと強い言葉でシンプキンズに、どういうつもりなのか、このような許し難い罪を犯してどうこらしめてやろうかと語り始めた。

幸いにも、シンプキンズの自尊心ゆえにベントン卿は歯止めが聞かなくなる前に止めた。その時、１台の自動車が車道をこちらに向かって来た。３つの窓から４人のガールスカウトたちの顔が突き出ていて、４つの顔はすべて笑顔で弾けていた。運転席では、制服を着て、すっかり元気と明るさを取り戻したミス・ウィンスロップが愛想良く微笑みながらハンドルを握っていた。凱旋門の下で自動車は止まった。ミス・ウィンスロップと４人のガールスカウトは勢いよく飛び出した。

「とんでもない過ちをしてしまいまして」とミス・ウィンスロップ。「でも幸いにも私たちすぐに気がつきましたわ。私たちはとても疲れていましたので、ロスレアを出たらすぐにテントを張ろうと決心しました。私たちがトランクを開けた時に目に入ったものは・・・」

「ドレス、ドレス、ドレス」と一番年下のガールスカウトが興奮と喜びで言った。

「でもテントが全然見あたらなかったのです」とミス・ウィンスロップ。「ですから私たちすぐにロスレアに運転して引き返して、荷物運びを見つけ出しました。彼があなた様のお名前を知っていて、結婚式のことを聞いておりました。ですから私たちはここまでこの車を運転して飛んでやって参りました」

「私たちも結婚式に出席させていただいてよろしいでしょうか」と一番年下のガールスカウト。「もし終わっていないのでしたら」

「あなたがたはちょうど間に合いました」とベントン卿。「もちろん結構ですとも。あなたがたは妹の結婚式に来てくれた最高の、一番名誉あるお客様方です。シンプキンズ・・・」彼はお抱え運転手の方を向いて言った。「たぶん私の妹のものと思われるその車を家の中に通してくれ。車の荷物を妹のところに届けてやってくれ。両方の車を完璧に磨いて、それからこちらの方のテントを庭の近くの一番良い場所に張ってさしあげてくれ。おそらく・・・」彼はミス・ウィンスロップに向かって言った。「あなたがたはどちらかといえばテントの中でお泊まりになりたいでしょう。しかし、もしお望みでしたら家の中にお泊まりする場所をご用意いたしますが」

「団長。お願い。テントにして」と一番年下のガールスカウト。

「なんなりとお望みのことを仰って下さい」とベントン卿。「あなたがたのおかげで、妹は自殺せずに済みましたし、シンプキンズも撃ち殺されなくて済みました。シンプキンズ、良く覚えておけ。ここはアイルランドだ。男は、全然大したことをやっていなくても撃ち殺されることが良くあるのだ」

（本稿は日本学術振興会科学研究費助成による研究成果の一部である。）